行事や慣習に生きる島津豊久

資料調査編集員　宮下 愛

はじめに

江戸時代から明治時代までの鹿児島の行事や慣習に佐土原（宮崎県宮崎市）城主であった島津豊久（元亀元（1570）年～慶長5（1600）年。永吉島津家2代）が登場する事例を挙げ、私見を述べたい。

1 赤星（あかぼし）

郷中教育の一環に薩摩琵琶がある。盲僧や琵琶の名手などを招いてこれを弾奏するものを座頭講（ざとうこう）という。青少年たちは身近な祖先・先輩などの活躍や逸話に聞き惚れ、楽しみとして聞いていたという。その段物の中に「赤星（赤星崩）」という沖田畷（おきたなわて）の戦いを題材にした戦記物語がある。九州北部を席巻していた龍造寺隆信に人質の14歳の息子と8歳の娘を残忍な方法で殺された赤星源次綱明が、佐土原城主島津家久に龍造寺の討伐を依頼するが、一度家久は断る。しかし、13才になる嫡男の豊久が同情して、家久に赤星を助けるよう願い出た。家久はこれを聞き入れ島原出陣を決意したとされる。

その「赤星」を絵にした「樺山清五郎の赤星絵」という資料が鹿児島市維新ふるさと館に所蔵されている。同館によると、13歳の樺山清五郎という人物が、豊久を自分になぞらえて明治14（1881）年に描いたものという。

清五郎がどのような家系で、なぜ豊久を自分になぞらえて描いたのかは、今回の調査で判明しなかった。しかし樺山家は、8代樺山善久の娘が豊久の実母であり、島津忠直（豊久実弟）の嫡男昌重が17代として養子に入っており、清五郎は遠い祖先として、豊久に特別な感情を持っていた可能性がある。

写真1
表紙には「明治十四歳 八月廿九日書 赤星繪　樺山蔵」とある

写真2
佐土原城にて赤星が島津家久・豊久父子を前に悲惨な窮状を涙ながらに訴えている場面

2 首途（かどで）

旅に出る前、吉日を選んで家を出発することを首途（かどで）というが、武家の男子は首途の際、台所口から密かに出て、釜の蓋で姿を隠し、決して後ろを顧みないようにしたという。この慣習は、松本彦三郎『郷中教育の研究』によると、先に記した沖田畷の戦いに出陣した豊久の故事によるものだという。

当時、豊久の母は元服前の我が子が戦地に向かうことに心を痛め、大変悲しんだ。そこで家臣が、台所口から密かに豊久を出し、その姿を大釜の蓋で覆い隠した。結果、戦地にて豊久は勇戦奮闘し、大勝利を収め凱旋したので、これを吉例として慣習になったものだという。

元服前に、初陣でありながら敵将を討取った豊久の事例は、慣習化するほど異例だったことがわかる。

3 士踊（さむらいおどり）

士踊とは、郷中の参詣行事の1つで、青少年たちが踊りながら、英霊を偲ぶもので、士風を鼓舞することにも用いられていた。また、地域により特色があり、顕彰する人物や催す時期は異なる。

青少年が躍る姿は勇壮で活気があるため人気があり、催される郷中内外からも見物人がいたという。

徳川家に没収された佐土原から豊久の家臣たちが移住してきた永吉（鹿児島県日置市）や堤村（宮崎県小林市）では、関ケ原の合戦で大将だった島津義弘の身代わりになって戦死したとされる豊久の命日9月15日に「永吉武士踊」や「侍踊」という士踊を奉納し、旧主の冥福を祈っていた。

また、小林地頭であった名越時敏（文政2（1820）年～明治14（1881）年）の日史に慶応元（1865）年9月15日「温水之永吉領分ヘ行掛り候処、旧例之士踊有之、何方ニテ候哉相尋候処、菩提所■■■（竜雲庵カ）寺ニテ有之由候ニ付則差越候処」と堤村で士踊を見て帰ったことが書いてあり、この当時も士踊が存続していたことがわかる。

まとめ

初陣から最期まで戦いに明け暮れた豊久という人物像は、質実剛健の士風を好んでいた薩摩藩の郷中教育を通して、これらの逸話となって後世に長く語り伝えられていたようだ。

実際は、豊久に関する歴史資料は少なく不明な点が多いため、実像と隙間がある偶像としての色が濃い姿となり、後世に伝わっているように感じる。

参考文献
川崎宗太郎『壮士必読薩摩琵琶歌』（薩摩堂、1886年）
『小林市史』第1巻（小林市史編纂委員会、1965年）
『鹿児島市史1』（鹿児島市史編さん委員会、1969年）
『鹿児島県教育史　復刻版』（鹿児島県教育委員会編、1976年）
『吹上郷土史　中巻（復刻版）』（日置郡吹上町教育委員会、1983年）
『鹿児島県史料　名越時敏史料二』（鹿児島県、2012年）
林匡「樺山家系図と明治・大正期の樺山史料調査」（『黎明館調査研究報告第26集』、2014年）

戊辰戦争と薩摩藩
ー「薩藩戊辰戦役戦闘史料稿本」を題材にー

東京大学史料編纂所　教授　保谷 徹　氏

はじめに

東京大学史料編纂所が所蔵する「島津家本」（約6,700点）には、多くの戊辰戦争関係史料が含まれている。「島津家本」とは、戦前に文部省維新史料編纂事務局（戦後、史料編纂所が合併継承）が借用し、島津家文書（国宝）とともに、1955～57年にかけて島津家当主忠重氏から購入したものである。

明治年間、市来四郎を中心に「島津家国事鞅掌（おうしょう）史料」の編纂が行われ、1928年には『薩藩海軍史』が刊行されたが、陸軍史の刊行までには至らなかった。この事との関係は不明ながら、「島津家本」には戊辰戦争の史料稿本が存在する。「薩藩戊辰戦役戦闘史料稿本」（以下、「稿本」）は、本編23巻・小荷駄史料稿本1巻・雑録1巻・別巻4巻・地図5枚から成り、凡例によれば「島津家国事鞅掌史料戦記」をベースに、他藩の記録やその他の史料で補填した、という事になっている。

「稿本」の構成

構成は、戦争の展開に沿って出軍した薩藩の方面軍ごとに整理されて冊子タイトルが付され、各冊の冒頭に目次が置かれている。また、日付順の事件本文（綱文）の後ろに関係史料・参考史料が配列され、時々「按ずるに…」という形で「島津家編纂員」による考察が付されているのが特徴である。全体の構成については、第1段階が開戦直前・鳥羽伏見戦争から上野戦争まで、第2段階が北関東の戦闘から東北・会津戦争、北越戦争、秋田戦争まで、そして第3段階が箱館戦争までとなっており、薩軍が行った戦闘の形式がまとめられた史料稿本と言える。

なお、「島津家編纂員」の考察は、会津・庄内の追討について疑問を呈しており、奥羽全般の状況を軽視して天下の公平を失した措置ではなかったか、としている点が印象的であり、大変興味深く感じている。

「稿本」から見る薩摩藩の戊辰戦争

まず、軍役体制・兵器・調練についてであるが、世界史的に見た時に戊辰戦争で日本における火器革命が起こり、それに伴い軍制が変化した事がこの戦争を考える上で一番の基本的なポイントではないかと考える。別巻では、薩摩藩における嘉永2（1849）年の家中軍役改定から文久年間（1861～64）の兵器一新、慶応3（1867）年の軍役改定の流れが整理されている。特に新兵器（ライフル銃）採用の画期が示され、同3年にはライフル銃（前装のミニエー銃）装備の銃砲隊の動員体制が出来ている事が分かる。そして、戊辰戦争時に新政府の東征軍は銃砲隊の動員を厳命して、弓・長槍・火縄銃を併用し、無用な従者（非戦闘員）を連れた近世的な軍隊をきっぱりと否定した。この時の海陸軍務総督は島津忠義、海陸軍務掛は西郷隆盛であり、薩摩主導で軍隊の在り方が変えられたのである。

次に、兵站（へいたん）（戦場の後方で、食料や軍需品の供給・補充を担当する任務）と輜重（しちょう）（戦闘に必要な物資を輸送する任務）に関してであるが、戦争遂行には戦闘員だけでなく、多くの軍夫（陣夫）＝輜重部隊の動員が必要であり、これらは近代戦において戦闘を成り立たせるための特に重要な要素と考える。そのうち、後方を支える様々な業務を担うのが小荷駄奉行であり、その役割が「稿本」の24巻に取りまとめられている。24巻は、薩藩東山道軍小荷駄奉行樺山休兵衛の日記を紹介しており、大変貴重である。

続いて戦場の社会史という事で、「稿本」から窺える実際の戦場、戦争の在り方についても注目する必要がある。戊辰戦争の特徴は、近代的な銃砲戦へ変化していく一方で近世的な戦場慣行が根強く残っていた点であった。「稿本」では、首取、分捕、生捕及び戦術として敵味方を問わず行われた放火や、戦場となった村々の実態が非常に生々しく記述されている。

おわりに

戊辰戦争は、旧幕勢力を一掃し、維新変革の第一歩となる内戦であり、軍事的にはライフル段階の西洋軍制や戦術が体制的に採用された画期（軍事革命）である。これを主導したのは薩摩藩であり、精粗はありつつも、「稿本」からは薩軍の行動記録全体を見通す事ができる。戦争遂行の諸装置、戦場の実態及び戦争と村々や民衆の関わりなど、戊辰戦争研究のための貴重な史料集である。

そして今後、薩摩藩内で戦争動員された人々の新たな史料が発掘される事にも期待をしていきたい。

（文責　調査史料室）

黎明館講演会のお知らせ

●「在外写真史料からみた幕末・明治初期の日本」

〔日時〕令和3年2月13日（土）13:30～15:00
〔講師〕東京大学史料編纂所　教授　保谷 徹　氏
〔会場〕黎明館2階　講堂（定員125席）　入場無料
〔応募〕事前に往復ハガキで申込が必要
※詳細はホームページをご確認ください。